

4技能のバランスの取れた英語力向上に向けて

～「小・中・高等学校英語教育支援事業」実践事例～

北海道教育庁学校教育局義務教育課

グローバル化が進展する中、本道の児童生徒には英語によるコミュニケーション能力の向上を図ることが求められています。

道教委では、児童生徒が4技能のバランスの取れた英語力を身に付け、主体的にコミュニケーションを図ることができるよう、道内全ての管内に推進校等を指定し、小・中学校、高等学校が連携した授業改善を推進することにより、系統的な英語教育の充実に向けて取り組んできました。この度、推進校の実践を基に、「話すこと」、「書くこと」領域における英語力の育成に向けた授業改善の事例を取りまとめた資料を作成しました。

なお、「聞くこと」、「読むこと」領域における英語力の育成に向けた授業改善の事例については、「4技能のバランスの取れた英語力向上に向けて～『英検IBA』を活用した授業改善～」を参考にしてください。

～本道の現状と課題～

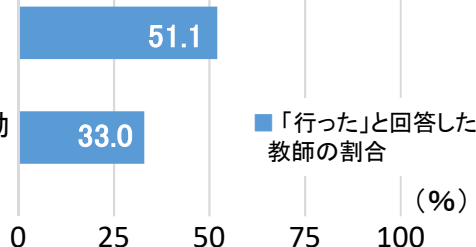
「令和2年度英語教育実施状況調査(北海道独自調査)」

◇ 4技能のバランスのとれた英語力の育成に向けた「言語活動」の充実

■ 生徒の英語による言語活動の実施状況

第3学年の英語の授業において、

- ・半分以上の時間(50%以上75%未満)言語活動を行っている教師
- ・おおむねの時間(75%以上)言語活動を行っている教師



「言語活動」の意義や行う目的について、教師と生徒で共通理解を図りましょう。



実際のコミュニケーション場面において、生徒が知識及び技能を活用し、思考、判断、表現しながら言語活動に取り組むことが英語力の向上につながります。

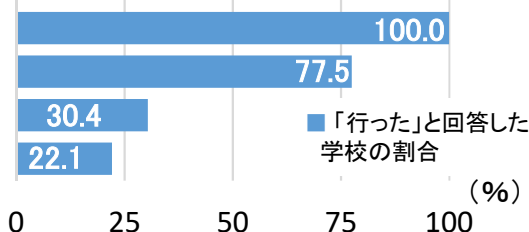
各校種の外国語等の授業において、児童生徒自身が表現内容を考えて、話したり書いたりする活動や、話の概要、要点、必要な情報を考えて、聞いたり読んだりする言語活動を意図的・計画的に位置付けることが大切です。

◇ 「CAN-DOリスト」の設定、共有、把握による授業改善の促進

■ 「CAN-DOリスト」の設定状況

「CAN-DOリスト」の状況について、

- ・設定している学校
- ・達成状況を把握している学校
- ・公表している学校
- ・小中連携した「CAN-DOリスト」を設定している学校



「Hokkaido CAN-DOリスト」を活用し、校種間の接続を踏まえた「CAN-DOリスト」の整備をしましょう。



「英語を用いて何ができるようになるか」について、「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標を明確に設定することが言語活動の充実につながります。

各校種において、「CAN-DOリスト」を活用し、児童生徒の学習状況や指導方法に関する情報を共有したり、達成状況の把握に基づく評価や授業改善を図ったりすることが大切です。

「話すこと」領域における英語力の育成に向けた授業改善のポイント

思い出を振り返り、発表する活動

Point

- 主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しをもたせる
- 外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる活動を位置付ける



言語活動
までの流れ

■ 授業概要（中学校教員による乗り入れ授業）

- 児童が学習の見通しをもつことができるよう、単元の終末における言語活動までの流れを示します。
- 単元の終末に向けて、ポインティングゲームを計画的に位置付けるなど、簡単な語句から基本的な表現へと段階的に理解することができるように工夫します。
- 小学校での学びが中学校へつながるよう中学校の学校行事などの表現を用いて、発表したい内容について考えるよう促します。



【単元の終末の言語活動】

中間評価により、生徒が自身の学習を振り返る活動

Point

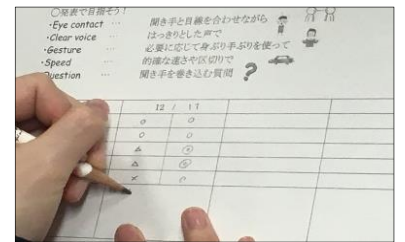
- 活動後の中間評価により、生徒に自身の学習状況を把握させる
- 「活動→中間評価(指導)→活動」を繰り返し行う

■ 活動間における中間評価の位置付け

- 生徒1人1人が自身の活動状況を把握し、振り返ることにより、改善点について考えることができるよう、活動後に中間評価を位置付け、必要な指導を行います。

■ 聞き手に配慮したスピーチについての指導

- 生徒の活動の様子を踏まえ、アイコンタクトや問いかけ、聞き手に分かりやすい表現などについて、具体的なモデルを示し、聞き手を意識したスピーチへの気付きを促します。



【活動後の自己評価】

指導と評価の一体化の視点からの授業改善

「言語面」及び「内容面」の側面からの指導

Point

- 「英語表現の正確さ」（言語面）は、知識・技能
- 「表現内容の適切さ」（内容面）は、思考・判断・表現

- 目的や場面、状況を意識しながら話す活動を一度行った後の全体指導

「言語面」から指導

- ・単語だけによる発話を文にさせること
- ・語順の誤りを訂正させること
- ・日本語での発話を英語にさせること など

「内容面」から指導

- ・何を伝えるとよりよくなるか児童生徒自身に考えさせること
- ・目的や場面、状況に応じた発話内容を児童生徒と共有すること など



「この表現を使って話しなさい」と言語材料や、やり取りのパターンを示すのではなく、目的や場面、状況に応じた発話内容を児童生徒に思考・判断させることが大切です。

誤りの訂正については、発話内容を受け止めることを大切にして、長いスパンで少しずつ正確さを高めましょう。また、児童生徒の実態や指導の状況を踏まえ、内容を焦点化した指導を行いましょう。



「書くこと」領域における英語力の育成に向けた授業改善のポイント

会話のやり取りを通して、自分の考えを書いて伝えるための表現を磨く活動

Point

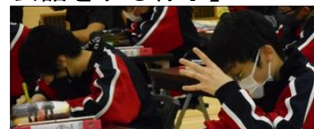
- 目的や場面、状況に応じた適切な表現について交流させる
- やり取りした内容を書く活動を位置付ける

■ 授業概要

- 生徒が日常的な話題などについて、簡単な語句や文を用いて即興でやり取りするとともに、目的や場面、状況に応じた適切な表現について交流する言語活動を行います。
- 既習表現や語句を用いて書くことができるよう、小学校やこれまでの学習活動を想起させます。
- 授業の終末に、やり取りや交流した内容を踏まえて、自分の考えを書く言語活動を毎時間位置付けます。



【即興で会話をする様子】



【書く活動に取り組む様子】

将来自分の住みたい場所について比較表現を活用してまとまりのある文章を書く活動

Point

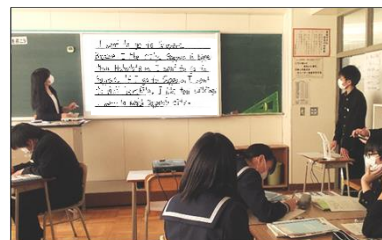
- 書く活動を段階的に位置付ける
- 「書く(個人)→交流(グループ)→全体指導→推敲(個人)」を繰り返し行う



学習指導案例

■ 授業概要

- 「『将来住みたい場所』について自分の考えや意見を整理して書くこと」を単元の終末に行うパフォーマンステストとして位置付けるとともに、単元全体を通して、修学旅行で訪れたい場所や理由などについて、説明したり書いたりする言語活動を段階的に行います。
- 書く活動を行う際は、生徒一人一人が書いた内容や表現について、グループ交流や全体指導を踏まえ、読み手に分かりやすく正しくまとまりのある文章になるよう推敲する言語活動を行います。



【書いた文章を交流している様子】

指導と評価の一体化の視点からの授業改善

「理解」と「使用」の段階による系統的な指導

Point

- 「理解させる段階」は、気付きを促す指導
- 「使用させる段階」は、理解を深める指導

■ 実際のコミュニケーションにおいて、言語材料を繰り返し使用しながら書く活動を行う中で指導

「理解」させる段階

- ・指導したい言語材料が使用される自然な場面を設定し、当該言語材料の意味や使い方の気付きを促すよう指導

「使用」させる段階

- ・使用する言語材料の提示がない中で自分の考えや気持ちを話したり書いたりすることを通して、当該言語材料の意味や使い方の理解を深めるよう指導



「特徴やきまり」と「日本語訳」の理解に留まらないように、当該言語材料が使用されている文章を少しでも多く聞いたり読んだりできるようにすること大切です。

文法のまとめが掲載されている教科書のページを扱うときに改めて指導したり、単元の終末の言語活動で当該単元以前に指導した言語材料も併せて使用させたりするなど、繰り返し言語材料を活用させることが大切です。

